一本杉窯跡群に類似するものには赤坂山窯跡群出土（14 世紀前葉）のものがある。共通する特徴としては、甕類は短く外反する口縁部が受け口状を呈する点や、擂鉢の大半が無高台で筋目が施条されていることなどがあげられる。しかし、赤坂山窯跡のものには、口縁部断面がN字形を呈し、縁帯下端が垂れるものが多く見られる点や、甕の体部に押印が見られる点で異なっている。

④　年代

地理的に近い八郎窯跡との対比では、一本杉窯跡群は 13 世紀前半頃とされている八郎窯跡より新しく、これに後続する年代が考えられる。また、一本杉窯跡群と同様に白石古窯跡群の支群である東北窯跡群も、八郎窯跡に後続するものと考えられており、東北窯跡群には一本杉窯跡群より古い要素が見られることを考え合わせると、一本杉窯跡群の年代はおおよそ 13 世紀後半頃と思われる。

なお、東北窯跡群が先行して操業していた可能性があることや、一本杉窯跡群では窯跡の数と焼成面数からある程度長期間操業していたと推定されることなどから、廃絶の時期は 14 世紀に下る可能性も考えられる。

また、常滑窯などの他地域の窯跡と比較してみると、いずれも 13 世紀後半頃～14 世紀前半頃の時期のものと特徴が類似しており、上述の推定を裏付けている。

なお、後述する消費地での状況も、13 世紀～14 世紀の遺物と共に出土しており、年代的な矛盾は見あたらない。

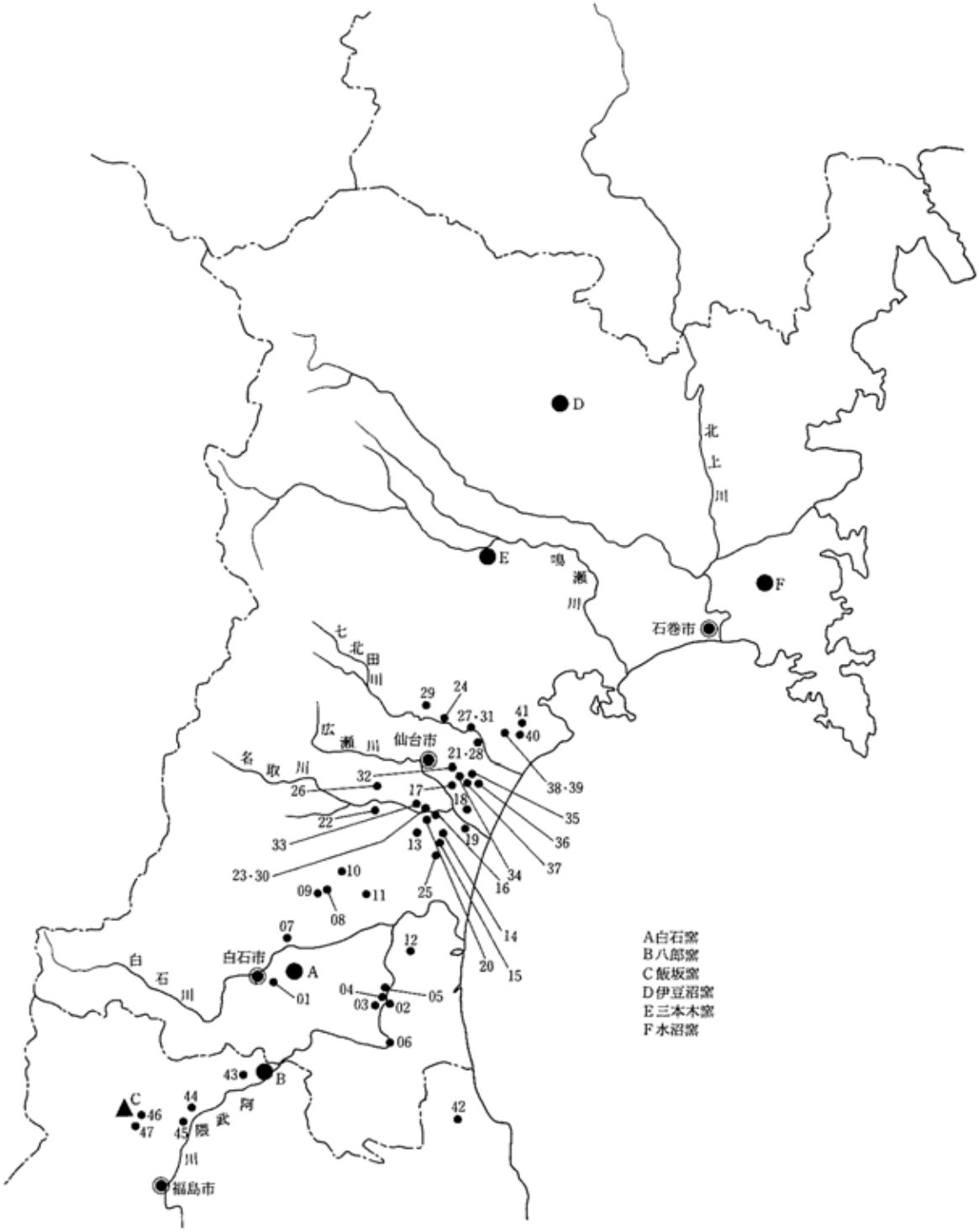
(4) 消費遺跡との関連

ここでは、城館や集落などの消費遺跡との関連について検討してみる。なお、白石古窯跡群の 4 つの支群（一本杉・東北・市ノ沢・黒森）で生産されている製品は大きな型式差がみられず、しかも焼成の状況や胎土も類似しており、消費遺跡から出土した遺物を支群ごとに区別することは不可能である。ここでは 4 つの支群を一括して「白石窯」の遺物として扱うこととする。

現在のところ白石窯産と考えられる遺物が報告されている遺跡は 47 ヶ所あり、宮城県中南部から福島県北部の広い範囲にわたって分布している（第 133 図、藤沼・千葉：1992 に加筆）。大まかにみると阿武隈川流域と名取川・広瀬川流域そして七北田川流域に多い。流通に関して、これらの河川が大きな役割を占めたことが想定される。

阿武隈川流域の遺跡には、角田市田町裏遺跡（斎藤：1991 他）や郡山遺跡（新庄屋：1980）、丸森町矢ノ目遺跡（後藤：1984）や県境を越えて桑折町金谷館跡（東北歴史資料館：1983）、福島市医天王寺跡（藤沼：1983）などがある。また、名取川・広瀬川流域の遺跡には、仙台市松木遺跡（工藤・佐藤：1986）や今泉城跡（佐藤：1983）、王ノ壇遺跡（小川：1993）などがある。これらの遺跡では消費されている陶器のなかでも白石窯産陶器の占める割合が他地域に比べてかなり高くなっている。

七北田川流域の遺跡には、仙台市岩切鴻ノ巣遺跡（白鳥・加藤：1974）や多賀城市新田遺跡（石川・千葉：1990）・山王遺跡などがあり、これらが現在知られている中では分布類の北限となっている。



01	谷津川遺跡	13	川上遺跡	25	栗遺跡	37	地蔵堂遺跡
02	郡山遺跡	14	清水遺跡	26	町田遺跡	38	新田遺跡
03	住社遺跡	15	中田南遺跡	27	東光寺遺跡	39	山王遺跡
04	田町裏遺跡	16	安久遺跡	28	洞ノ口遺跡	40	高崎遺跡
05	吉野城跡	17	南小泉遺跡	29	長命館跡	41	西沢遺跡
06	矢ノ目遺跡	18	今泉遺跡	30	王ノ権遺跡	42	三貫地遺跡
07	持長地遺跡	19	四郎丸遺跡	31	若宮前遺跡	43	金谷館跡
08	赤鬼上遺跡	20	松木遺跡	32	国分寺跡	44	土井の内遺跡
09	戸の内縄遺跡	21	湯ノ巣遺跡	33	裏町古墳	45	大樋遺跡
10	東足立遺跡	22	山田条里遺跡	34	中在家南遺跡	46	大鳥城跡
11	戸の内遺跡	23	富沢遺跡	35	明屋敷遺跡	47	医王寺遺跡
12	館南遺跡	24	赤生津遺跡	36	岡崎遺跡		

第133図　白石窯産中世陶器出土遺跡

なお、宮城県の北部地域に関しては調査例が少ないことや、白石窯とほぼ同時代に操業した多高田窯跡や伊豆沼古窯跡の製品との識別が困難であるため不明な点も多い。この地域については今後の調査例の増加や整理作業が進展すれば、分布域はさらに北に拡大する可能性がある。

次に、これらの遺跡での出土状況や、共伴する遺物について検討する。

蔵王町持長地遺跡は阿武隈川に合流する白石川の流域に存在する遺跡で、中世の武士階層の屋敷跡と考えられている。表土中から東北窯跡で採集されている正格子の押印と同一意匠の押印をもつ甕と擂鉢（筋目の有るものを含む）、常滑5～6ａ期に対比できる甕（同一個体と考えられる甕が4号建物跡から出土）が出土している（黒川：1980）。

名取市川上遺跡は名取川流域の遺跡で、中世の名取熊野那智神社の門前町と考えられている。多数の建物、土倉、井戸などの遺構とともに多量の陶磁器類が出土している。中でもＳＤ-01 溝跡の堆積土からは白石窯産の甕・擂鉢とともに常滑5期の甕・擂鉢や、13～14 世紀に位置付けられる中国浙江省龍泉窯産の青磁碗などが出土している。また、ＳＫ-02 土壙からは白石窯に特徴的な受け口状を呈する短頸壷が、基本層位のⅡ層からは龍泉窯産の双魚文の青磁碗が出土している（恵美：1990）。

仙台市今泉城跡は中世から近世にかけての城館跡である。館内を区画する溝跡や井戸跡から多くの陶磁器類が出土している。なかでもＳＤ-11 溝跡の遺物は比較的まとまっており、堆積土中から白石窯産の甕・小壷・擂鉢（筋目の有るものを含む）と、常滑5期の甕と6期の壷や瀬戸Ⅲ期の瓶子（もしくは梅瓶）が出土している。

仙台市松木遺跡は古代から近世までの屋敷・集落跡で、Ⅱ期（12～14 世紀）の遺構群は武士階層の屋敷跡と考えられている。この時期のＳＫ-130 土壙では白石窯産の広口壷と 13～14 世紀に位置付けられる中国産の青磁（盤・碗）、ＳＤ-02 溝跡では白石窯産の甕と 13 世紀代とされる瀬戸産の卸皿がそれぞれ堆積土中から出土している。

多賀城市新田遺跡は中世の方形区画をもつ屋敷跡と考えられている遺跡である。区画の溝や堆積土（基本層位Ⅲ層）から多くの陶磁器類が出土している。ＳＤ-634 溝跡からは白石窯産の小壷・甕・擂鉢と常滑5期の壷が、ＳＤ-637 溝跡からは白石窯産の擂鉢と常滑5期の甕・擂鉢がそれぞれ堆積土中から出土している。

このほかにも、亘理町館南囲遺跡（古川他：1991）では白石窯産の擂鉢（筋目の有るものを含む）と常滑6ａ期の甕や13 世紀中頃～14 世紀初頭にかけての龍泉窯産の青磁碗が、角田市郡山遺跡（新庄屋：1980）では白石窯産の甕・擂鉢（筋目の有るものを含む）と常滑5～6期の甕が、柴田町戸ノ内遺跡（佐々木：1980）では白石窯産の甕・壷と常滑6期の甕が表土から出土している。

白石窯の製品を出土する遺跡の概要は上記のとおりである。明確な共伴関係はつかめないものの、常滑5～6ａ期（13 世紀中葉～13 世紀末）の甕・擂鉢、13～14 世紀の中国製の青磁、13 世紀代とされる瀬戸産の施釉陶器などとともに出土する例が多く白石窯製品の使用・廃棄年代の一端が窺われる。